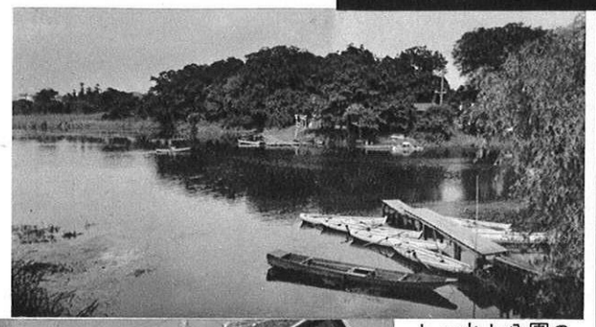
くまもと ところどころ

熊本市は、熊本城をはじめ江津湖、水前寺公園など勝れた観光資源が多いが、さらには「水と森の都」のイメージを活かした観光都市づくりの構想も進められている。

下・旧五校の赤門は漱石文学のゆかりとしてその面影を……

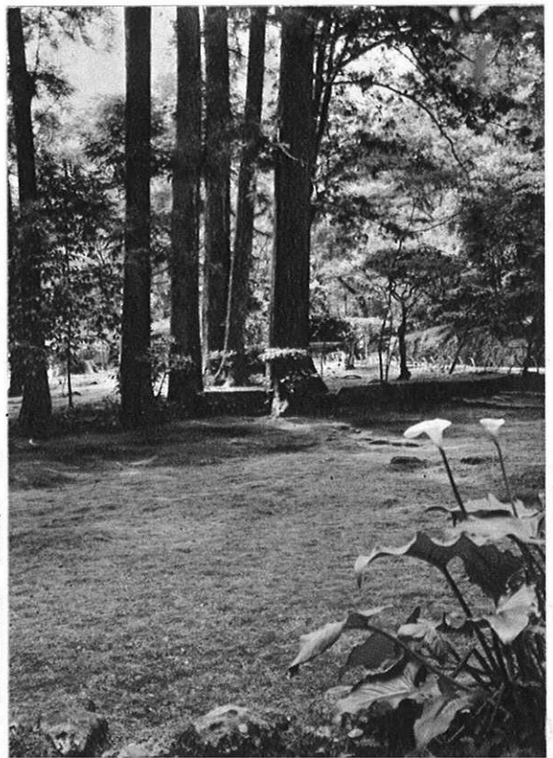


上・水上公園のたたずまい……江津湖

上・熊本市川尻町。伝統ある桶屋や刃物屋の老舗が並んでいる。

上・古今伝授の間からみた水前寺公園の築山と池

下・阿部一族の墓もある北岡自然公園。石畳の回廊が美しい。



右・立田山自然公園の中にある泰勝寺の庭

下・武蔵が修道したという岩戸観音のほとり

ここに人あり

駆ける青年住職

★ 熊本市 三坂恵人さん

光徳山妙立寺。花岡山を背にして、巨大な山門と本堂がそびえるこの日蓮宗の寺院は、一見して、由緒ある古刹と思わせる。初代住職は、細川の肥後入国に同行した僧といわれ、二七〇年の歴史を持つ寺と聞けば、成程とうなずける。

妙立寺住職、三坂恵人さんは〝お住職〟と呼ぶより、むしろ、若々しい現代青年である。昭和十五年生れ二六才。済々黌から立正大学へ進んだが、父三坂恵信師が病に倒れたため、急拠帰郷し、そのまま三十七年十二月、恵信師の跡を継いで、住職となった。訪れたとき、青年住職は、しんしんと底冷えのするだだっ広い本堂でひとり、若さに似ぬ重厚な声で、朗々と読経の最中であった。その背中にはさすがに、求道者の厳しさがうかがわれた。

ルンビニアンクラブ

〝庫裡の奥座敷から、若者たちの明るい笑声が聞える。三坂さんを会長とする、ルンビニアン・クラブのメンバーたちが、集まっているのである。

この奇妙な名の集団は、三坂さんが呼びかけて作った人形劇のグループである。既成仏教の場合、若い青少年がお寺に寄りつかないのは何故か。青年をお寺に、子供たちに夢を、と考えたのがまず発端だったのである。

無目的的行動につっ走る青年たちに指標を、若者の悩みを解消してやりたい、衆生済度、などといった、いわゆる構えたものは、一応置くとして、この場合、青年僧呂の純粋な行動性が、そうさせたに違いない。

三坂さんの呼びかけに応えて、檀家の青年たちや、知り合いの若ものたちが集まってきた。昭和三十七年二月十七日、釈迦涅槃の日に、人形劇のグループは発足した。グループ名は釈迦生誕の地、「ルンビニ園」からとって、〝ルンビニアン・クラブ〟と付けられた。

青春とは

素人ばかりの人形劇団である。全く手さぐりで台本、人形、舞台を作った。米屋、クリーニング屋、印鑑屋さんもいる。自動車会社、電気工事会社に勤めている人もいる。ただ、一生懸命人形劇ととり組んで、こぎ付けた初公演は、三十七年四月八日、花祭りの日であった。

それから、妙立寺で子供向けに公開するほか、養護施設、精薄児施設、あるいは、校区内の子供会での公演と、活発な活動が開始されたのである。

ルンビニアン・クラブは、現在二八名、平均年令二三才という。いま、会員たちは、一人一人、はっきり言える。「私たちは若者だ。青春の悩みや迷いがある。でも、その悩みや、迷いを、解決できないまでも、解決する糸口をつかめる自信があるんだ。それは、このクラブに参加して、みんなと一緒に行動するから」と。

マイペースで歩く

三坂さんは、若さに似ず、成果を急がない。決して、押しつけがましいことをしない。クラブの活動をはなやかなものにしようと思わない。自分たちの分をわきまえて、どこまでもマイペースで歩く。ただし、三坂さんの行動力は、いささかも人後に落ちるものではない。彼はお坊さんには珍らしい、スポーツマンである。熊本県サッカーリーグの三部で優勝し、今度二部入りをした、サンデーキッカーズの強力なフォワードのメンバーであり、母校西山中のサッカー部コーチである。

サンデーキッカーズは、どこのチームにも所属できない人達ばかりで編成したチームで、外人二人を含めた、誠に楽しいチームである。人の和を尊び、人は皆友達になるべきだといういかにも恵人若和尚の面目躍如である。

未来をみつめて

ルンビニアン・クラブでは、人形劇のほか楽器を扱えるクラブ員によって音楽部も誕生している。ゆくゆくは、みんなでヨットを製作して、ヨット部も作りたいと話している。

今年四月の公演には、自分たちで書いた、「未来へ飛んだ泥棒」と「彦一と天狗」を用意している。「未来へ飛んだ泥棒」は、現代の機械文明に対する痛烈な皮肉がこめられている。

ともあれ、しっかりした足どりで歩く若い住職をリーダーにして、この若もの達は、現代に対する懐疑にも、確かな目で解答を見出して行くだろう。未来へ向かって飛び出して行くに違いない。

■ 四月公演を前に本読みにも熱が…